

アラン
家族感情

高村昌憲訳

この研究は第一に仕事に関するものです。ここで扱う問題は今では古典的なものであり、主として若い娘たちに当てられた教育の中にあります。もしもオーギュスト・コントの思想に従ったなら、余りに明白な困難を如何にして乗り越えられるのかを私は示したいと思います。しかし私は、その点に関してコントの厳格さで感動的な教訓に倣ってより詳細に押し進めることよりも、コントが思考したことを正確に認識することは心配していないのを先ずお知らせします。

しかしながら、私が本書において提示する幾つかの指摘は、私が家族の聖書と呼んでいる『実証政治体系』の第二巻を読むことに、一人ならず父親や母親が戻るのは有益であり、又全ての人々にとって熟考するに適しているように私には思えました。女性の権利と義務の問題について、そして相関的なものである男性の権利と義務の問題について、或る女性がコントに言いました。「その点に関しては、あなたしかおりません」。このことは今日でも未だ真実であると思えます。この問題を別にしても、〈社会学〉から〈生物学〉までには付着点があります。

消えることのない一連の六つの学問はよく知られています。数学、天文学、物理学、化学、生物学、社会学です。これらの全ての学問の中に連続していて強固なもので一杯になったものに関係しながら、創り出すことが出来る沢山の正しい観察の中で次に来る学問が先行する学問に支配されていて、そして調整される仮説を先行する学問から受入れることを私は考慮に入れます。それは社会が家族によって構成されているのであって個人によって構成されているのではありません。そして、もしも社会の実証的研究そのものを指導する流れが生物学によって齎されるなら、家族は第一に生物学的であるので、その通路を創らなければならないのと同様に、家族によることを哲学者と共に呼び戻すことを意味しています。ここでは社会的感情が練られて、強くなり、自分のために取って置くことになります。そして、それが所謂周知のことになりますが、周知のことは屢々考察が足りないことになります。前置きはこの位にします。（完）

誰もが理解しているように、母親と子供が創る社会は第一に重要なものであり、全ての規範になります。いずれにせよ昔は男女が最初です。私は、社会としての男女が母親の情操としての手本や反応によってしか完全にならないと良く理解して、人間の男女を最初に論じることになります。愛はその本質によって寧ろ無秩序的であり、混乱を齎すものです。愛が一つの家族を崩壊し、家族という一本の枝を離すことは誰でも良く見ます。愛は、その最初の栄光と驚くべき思い上がりの中で、愛を受ける資格の無いものとして、義務そのものの観念を拒絶していることに気付くだけで十分ですが、反対にそれはおしゃれという大昔からの遊びによって何時も解体されて、何時もやり直されるものである自由な同意を求めます。一瞬で自由に選択させること、権力という全ての権力を拒否すること、その様なことはこの困難な人生において最も大きな幸福と、最も大きな不幸の源泉である酔わせる観念です。誓いが愛の最初の時間で自然なのは本当のことです。しかし、人が誓いを軽蔑し、そこから相手を解放して、ついには求められてもいない権力を大胆に試みることも自然です。その様な感情は彼自身に委ねられていて、早く老け込みます。機会と気質が屢々、何時も許すことの出来ない侮辱の原因になるように導くだけではなく、生物学的力は絶えず私たちに相応しい年齢に見せません。そして、恋愛から最も美しい友情へ移行するのが大変に遅くなるように私たちに命じます。もしも恋愛そのものの実質を生きるために、人間の世界から引き下がる恋愛が如何に終わるのかを、感動的な絵画の中に観たいならば、バルザックの『二人の若妻の手記』を読まなければなりません。ルイーズ・ド・ショリュウの悲劇的な冒頭に比べれば、そこでは小説的なものが彼女の意志そのもので死んでいるのが見出されますが、その意志とはルネ・ド・モコンブの賢明な結婚です。最初は社会的秩序に捧げて、あらゆる場面に繰り広げられた子供たちによって元気づけられた理性による結婚です。それが述べていることは、その原則から直ぐに子供たちの運命や財産の譲渡へ向けられた両親の英知が最終的な誓いを要求していることです。それは愛が大変に軽蔑するものかもしれませんが、罵詈雑言が無ければ拒絶出来ないものです。それ故に全ての人々は、現実の社会が自分の思い描くイメージの社会の中で愛し合っている男女に変えて仕舞い、自分の政府と法律と習慣を持っていることに意見が一致します。以上のことから配偶者の権利に関する問題があります。

愛は、人が認めたように、権利という観念に奥深い違和感があります。一人の人と人との関係である二人の自由に関する関係も、社会が強制する公的な契約によって侮辱されていると言わない代わりに、深い困惑が常にあると言わなければなりません。ここでの権利はそれらの人物たちの尊厳からは決して生まれませんでした。寧ろ、まさに事物や交換の規則から生まれたのである、と理解しなければなりません。その結果、自然なこととしてそれらの人物たちのことを再び上げます。何故なら交換の必然性は決してその必然性そのものよりも高い秩序のものではなく、それに反して非常に急を要するものであり、そして決して忘れることが許されないものであるからです。ここには既に、生物学的法則が示されていますし、直ぐに高等な機能を調整します。つまり第一に生きねばならないからです。そして、それは確かに商人たちを保護することにも導いた、市場を守るための急を要する配慮です。同様に、何度もそのことに気付かれたように、それは

財産の増加、それらの保護、契約の履行、信用の裏付け、最終的な第三者の諸権利を調整するための配慮ですが、これらは第一に婚姻を規定しています。そして、それは自然であると同時に怪しからぬことですが、価値と交換が友情に従って決して定まらないのが自然であると同時に、怪しからぬことであるのと同じです。ここでは秩序を示していますが、それは常に下から上へ動くもので、常に私たちのより一層崇高な思想から、従うことの必然性へ戻ります。この観念は少しも気に入らず、余りにも屢々類似という何らかの不当な取得に主要な原因をそこから求められますが、今からそれらの根本まで行くことは悪いことではありません。私たちは耐えず従います。例えば、重力には従わなければなりません。空腹や喉の渇きや睡眠にも従わなければなりません。石は従うことを望みます。自然の必然性が通過して、私たちを押し潰します。しかし私たちを押し潰す前に、まさしくその必然性は苦痛や、呼び戻された雄弁や、動物的な強さによって私たちを捕らえます。コントが絶えず思い起こさせてくれるように、下部が上部を支えています。海には従わなければなりません。事物の大きなメカニズムは私たちを支えている海のようなものです。そして嘆くことは少しも役に立ちません。行政権が望んでいることを命じている、と良く信じる事が出来ます。兎に角、必要なことを知らせるのに余りに忙しくて、決して時間が無いのは事実です。誰も最早、王にしか服従しません。

この観念はまさに簡単に呼び起こされ、男性と女性のお互いの性の能力と適性を十分に理解しさえすれば、家庭の管理は非常に明らかになります。男性は活動的な性であり、女性は感情的な性であることを、コントは思い出させてくれます。コントが言いたかったことを良く理解することだけしか重要ではありません。構造そのものによって、更に生物学的機能によって、男性の役割は破壊と征服と、それが無ければ私たちの活動が直ぐに不可能になる整備することの労働を追い求めることであるのは明らかです。狩をすること、釣りをすること、開墾すること、運搬すること、建築することは男性の仕事です。男性は絶えず何かに従っています。それは急流、雷雨、樹木、ライオン、蛇は、先ず見分けて正確に判断しなければならない力になるのです。私たちは、未開の状態を忘れたいと思っていますが、その必然性が私たちを激しく悩ませることはないと思いたいのです。しかし何の力もありません。フランクリンは言いました、「空腹の人が労働者の窓辺で見詰めているが、思い切って這入って来ることがない」。これ以上適切に言うことは出来ません。必然性は少しも遠くにありません。それは最早間接的でさえあっても絶えず私たちに圧力を加えます。重力は絶えず私たちを大地の方へ引っばるように要求しています。人間はそれ故に何時もこの戦いから戻って来ても、直ぐにそこへ引き返します。そこから男性の思考は力強いが短く、何時も道具を求め、何時も道具の刃を探します。それが良くも悪くも延びて行きます。もしも物事が別な風に少しも善処されないとしても、殆ど男性の思考を専念させません。その思考はそこで夢を見ませんし、決して考え込みません。その様な観念で行うことは弱さであり、力ではありません。そして、それが命令の源泉です。何故なら命令するのは人間ではなくて、事物であり、実際に現存している状況であるからです。男性の管理は、全ての管理が似ています。その休止は何時も決して考慮されない現状の上に基礎が置かれ、楽しいか楽しくないかが斟酌されなければならないからです。ここでは多くのものを取り除かなければなりませんし、多くのものを押さえ付けなければなりません。ヘラクレスのものでもある活動的な性の本来の機能によれば、その役割は外部からの必然性を告げることであり、快い夢想を終わりにさせることです。

女性が男性の権力から逃れる時、直ぐに現実の力と向かい合うことになりますが、主人を変えることはありませんでした。

その点に関しては、難しいことは少しもありません。女性は思考の特色を示すのが問題になる時、あるいはお望みなら女性の才能が問題になる時、人はもう少し躊躇します。ここでは一段と大胆に単純化しなければなりません。もしも生理学的に収斂させて、種としての固有の調和に倣って先ず子供を養育する機能が思考と関係していないものであったなら、もしも誕生へ続く数々の世話が絶えず繰り返されるマッサージや良く知られている最も納得させる身振りによって妊娠を続けて熟考と結び付くことなく分離された本能に戻らなければならなかったなら、その時は思考から生き生きとした肉体までの関係を否定しなければなりません。そして何度も吟味された指導的な観念を否定しなければなりません。その上、直接的経験によるものも否定しなければなりません。それは私たちの全ての思考が、私たちの身振りと表情と態度によって形づくられたものです。要するに、もしも生理学が女性の思考を少しは説明するように導く道でないならば、その時の道とは何でしょうか。男性たちの打明け話が既に偽りで装ったものであり、女性たちの打明け話も謙遜や遠慮に見るように殆ど全てが尊敬すべき原因によってそれ以上のものであるに違いないことは多くの理由から明白である時、女性たちが自分自身のことを言ったり書いたりしているものを人は探しに行くのでしょうか。それ故に思い切って多くのことをやらなければなりません。その始めには危険を冒さなければなりません。その次に、もしも僅かな反論に対して指導的な観念を堅固に保持したなら、全てが明らかになるでしょう。

女性は自然に倣って子供を産んで育てます。その目的のためには避難所の室内で周りの物を全て使うのに大変に忙しいものです。その様にして女性は自分の思考に関して、男性の領域にある室外の必然性から分離されています。これは最初の見方ですが、既に大変に縁遠いものになっています。その知恵は常に服従するものであり、私たちの目的に全く関心の無いメカニズムによる熟考にしか休息しません。しかしながら、それは便利で修正出来るものであり、苦労が無い訳ではなく、限界も無い訳ではないのですが、少なくとも敬意が無いものです。この大胆な知識や機械工や不敬虔な人は、女性には自然ではありません。いや、女性はそれを理解出来ないのです。抽象的な規定、方法、証明は、精神にとっては同一のものです。しかし自然は、全ての家でも等しく配置されている訳ではありません。そして物理学の目的は、何時も対立する世界の征服に向かって働いているのですが、女性にとっては一貫して愛されている瞑想の対象では決してないでしょう。女性の最も愛する思考で最も自然な思考は、それと反対のことに戻るようになります。女性の行為は室内そのもので、絶えず包み隠したり守ったりする人間の姿に戻るようになります。ご存知の様に男性は苦労が無い訳ではありませんが、男性の巧妙な思考から、昔から常に崇拜されていたその人間の姿を拒絶していなければなりませんでした。神人同形説は、そのために習慣としない訳には行きませんし、それどころではありません。反対に大変に価値あるものです。最も高い価値があるのも同じで、男性は自分自身の姿を決して忘れない程です。行動するには二つの方法があるからです。物理学者は事物に従います。そして人間の姿を容易に危険に晒します。この法則を理解して下さい。この法則によって男性は、男性を保存します。もう一つの方法は、道徳によるものです。男性が自分自身に尽くすことで真つ先に支配されます。ここで気付

くことは、女性の思考の主題が屢々私たちを傷付け、何時も私たちを脅し、良く私たちを変える屋外のものでは決してないことです。しかしそれは寧ろ、そうでなければならないものであり、男性が男性であって、男性であり続けるためにはそうでなければならないことなのです。道德の秩序とか完全なものとは、それ故に女性の考えでは自然の対象です。しかし私は、家族の対象に釣り合った大変に広がった観念に戻したいと思います。

産業の秩序はその変化、闘争、敵の騒音、人間の姿と機械の非人間性との対立で注目すべきです。建築現場、工場、仕事場は折ること、砕くこと、材料を加工すること、溶かすこと、鍛えること、磨くこと、ぴったり合わせることのための仕事を具現化して示していますが、常に私たちが必要としているからです。しかし、それは第一に材料そのものに応じています。敵対する力や重力や雨や熱や寒さに応じています。その意味では家、産業製品、男性の仕事は、非人間的な要素による形状を受入れます。壁、梁、アーチ型天井は、重力に応じています。窓は、太陽に応じています。屋根は、雨、雪、風に応じています。最も単純なテントも、大地に置かれた屋根のようなもので、非人間的な形状のものです。城はその外形から排除するのを目的と見做すので、人間的な形状も又否定します。船は第一に海に応じて造られていますが、人間に応じてはいません。これらの全ての発明品からは、急を要する言葉が読めます。「せねばならない」です。それは何時も外部の敵対する力を私たちに思い出させます。反対に、大変に良く住居と命名されたものの内面では、「せねばならない」という同じ言葉が全く別の意味に理解されます。何故ならベッド、肘掛け椅子、テーブル、階段は、人間のために作られているからです。人間の姿はその穴の中で自らを鑄造しているようなものです。それは自ら可能の範囲でその姿が君臨しています。漁船や飛行機や潜水艦の中や商船の中でさえも、外部の必然性は人間の場所を小さくしています。男性の思考はそこで全てを調整します。反対に女性の思考は如何にして全ての事物を配置して、人間の姿が出来る範囲でそれに応じて保存しているのかを理解して下さい。それは勇気によって可能になっているこの道德的秩序の繰返しによっているのです。つまり「ねばならないだろう」ということです。

下部は上部を支えているので、男性は先ず子供であるので、先ずは食べなければならないので、その様な思考が動物的欲求の水準に止まったり、恐らくそこに良く戻されたりするのもかもしれません。しかし男性の思考が、自らの労働を再び高くすることよりも、多分もっと容易に、その様な思考はそこから再び高くすることが出来ます。何故なら崇拜された人間の姿から、崇拜された人間の精神までは遠くないからです。けれども信じて待つこと、そして未だ無い何らかの完成を瞬間的にも探ることは母にとって自然ですから、精神のこの宗教は決して抽象的なものではありません。そして、その判断力は先ず感情であり、そして判断力が理性を見出すのもそこです。それらの思考を支えて観念の対象となる生き生きとした人間からも又、決して分離されることはありません。予測は人間のものですが、経験も人間のものです。人間性は、女性の瞑想にとっての不変の対象です。この哲学はコントが理解したように、その意味では積極的です。しかし同様に一人ならずとも弟子が、コントの第二哲学と呼んでいて付け加えていたものを前にして抵抗しました。同様に女性の思考は、実証的な性の計画や証拠に自然にぶつかります。そして、もっと悪くなると没落します。何故なら君臨することしか出来ないからです。

その立場は精神力によるものです。道德的な判断力が、事柄に逆上する処には決して無いのを

人は知っています。その中でも戦争は最も大きな事例です。恐らく戦争の精神は女性の思考とは全然関係の無いものです。しかしながら、ここでは念を入れて見なければなりません。何故なら女性たちの裁きでは、力ある者を喝采して選ぶことは珍しくないからです。勿論、それは曖昧です。一方では、人間の姿は正確な意味を理解すると戦争において危険に晒されますが、一つならずのやり方によります。それらは単に重傷を負わせられる肉体だけではありません。敵は同じ必要性から行動します。敵は目的の場所に移動しました。この行動は男性のものです。女性は戦争が解体するものを、作り直す準備をしながら可能な限り身近に、その行動を否定するためにしか考えることが出来ません。しかし他方では、戦争はその危険の中で外のあらゆる危険の中と同じに、人間は希望を乗り越えるので感嘆したり愛したりする瞬間でもあります。それ故にここでは女性の考えは一般に不可解です。しかし、人類の歴史はもっと良く明らかにしてくれます。恋愛の推移によって騎士道的な制度が、力による勝利よりも寧ろ苦難を探すことに戻されたのは明白であるからです。従って戦士の勝利はいわば戦争の外に引き寄せられて、最も奥深い正義に従属させられましたし、常に自己の高潔な抑制に戻っていました。この偉大な観念が平和を齎しました。それはコントが予測したのに反して、戦争を一種の工場の労働に変える、産業の時代が用意されていました。驚嘆する幸福が、数々の原因と方法に基づいた実際の光を一種の暴力と共に拒絶させることになるのです。それは女性の判断力が自ら発展する代わりに、自分自身を閉じ込める数々の理由の一つです。

人が争うものについて見なければなりません。女性は実際に多くの人々が並外れて大きく判断する権力を行使します。しかし、他方ではこの権力が厳密な権利において何でもないようなものかもしれないので、人はびっくりします。妻や母の立場において最も行使するもので、それ程適切であることに注目しましょう。そして女性は独自の力を行使する立場にない限り、これらの指摘に本質上あらゆる法律の手段から逃れる霊的な力を十分に考察されなかった限り、明らかにならないのでびっくりさせられます。コントは女性たちの力を、予期し得ないで世論と名付けられている政治的に譬えるのが好きです。そして世論が望んでいることと望んでないことを知ること以外に、コントが世論に決して背いていないのを認めましょう。世論とは如何なる明確な力でもなく、非人間的な必然性によって示された限界まで全ての力を衰えさせるでしょう。そして殆ど誰もがそこまで敢えて期待しないのは明白です。プロレタリアたちも、力による権力を手に入れようとしなければ、私たちの哲学に従って拒絶の唯一の権力によって、あらゆる暴君に反対する立場で、不屈で直ぐに有効な抵抗を自ら見出します。何故ならプロレタリアたちは、その時に霊的な力を喪失したのを自ら見出すからです。そして反対に外部の必然性に従って、余りに高く評価されている彼らの塔を疑うことになります。これらの観念に従うのは正しいことであり、しかも新しいことです。独自の権力の中にある〈教会〉の力は小さくありません。裁く機能にとってはより良い見本を与えていますが、力のよる支援を求めるにつれて次第に何時も有効でなくなります。このパラドックスが説明しているのは小さな理由です。例えば改宗させる力は、それが強制によるなら全てを失います。ここでは力によって愛されているという非論理的な観念に後戻りします。勿論、本当の理由は、瞑想する思考が実行する思考と同じ点を見詰めることが出来ないことにあります。行為は常に思考を変えますが、変える必要がなくなればなくなる程、恐れな

くても良いことになります。そして、そこから強制する力は、納得させる機能を直ぐに無効にすることになります。精神は強制することが出来ません。ところが純粋な精神の中で私たちが死んで仕舞うよりも、もしも私たちが自然に冒険から解放された人間の姿を持ち続ける働きによって女性の思考を明確にしたなら、そしてもしも私たちがこの保守的な働きを十分に検討するなら、何時も延期させられますし、誰も無視することが出来ません。女性の力は絶対的に法律の中ではっきり言い表せるものではなく、これからも決してそうならないのを私たちは理解するでしょう。

如何なる脅威も無く如何なる力の提示も無く注意力を要求するものは、尊敬と崇拜の対象です。この感情のニュアンスは、恋愛の駆引きにおいては先ず眼に見えないものです。何故なら、始めは男性の裡では服従の覚悟に集中し、女性においては同意する気持ちに集中する優雅な交換が行われるからです。この幸福な状態はひと月も続かないと言われていて、諺にもなっています。恋愛は年齢の影響を受けて、少しずつ変わるに違いないと誰もが良く感じています。でも、それでは言い方が不十分です。恋愛は何から何まで、全てが極めて早く変わるに違いありません。止むに止まれず全然憤み深くないからです。一方で女性は、男性の駆引きや英雄的な真似ごとから身を引かなければなりません、それは子供を優先させて応えるためです。それは彼女自身についての労働、そして彼女自身の回りの長く続く労働の始まりです。子供と共通の隠れ家で、生命がなかったり動物的な自然に従ったり変えたりする労働から縁遠くなります。人間的であったり非人間的であったりする内容からも縁遠くなりますが、それは社会がその重さや面積によって感じさせてくれるものです。女性はその意味において最も広いものを取得する必要性を今後は表すのでしょうから、男性はそれらの方法を管理するようになるでしょう。ここでもう一度言わなければなりません、誰も命令していませんし、命令するのは外部の必然性しかないのです。従って声も出ないし聞こえないこの力を、自然に伝える使者が男性です。厄介な役割とは、管理することそのものの役割です。ここには二重の無知があります。一方で女性は、愛されている女性が彼女を愛している男性の同意を手に入れているのと同じ方法で、外部の財産を手に入れると何時も余りに信じているので、生活したり成功したりする真の方法に無知であることに陥り易いのです。幼年時代の経験は、祈りによって全てを手に入れます。その観念が多少なりとも全てに君臨します。しかし男性は、仕事の圧力や交換の法則によって、そこから解放されます。男性が自ら見出す依存と、結局のところあらゆるやり方で報いる必然性は、女性を最も驚かすことです。そして屢々服従する必然性は、女性自身よりも男性自身の裡でより一層生き生きと感動させます。その代わりに男性は、確固たる信仰に見出すもので、常に譲歩しても常に戻る、思考の真の発条を未だもっと深く知りません。彼は自然に不確かでしかありません。その様なものは事物を前にすると強く、自分自身を前にすると弱い男性の真面目さの内奥です。悲観主義や懐疑論は男性の病気です。女性の裡ではその種が集まったり自信を持ったりすることよりも、もっと良いものを生んでいます。女性はやり直しますし、自己を一新します。

男性と女性の二つの性のうち各々の性は、独自のものである仕事に素晴らしく精通していて、それが不屈の驚くべき種にしていることは確かです。恋愛はお互いのこの感嘆によって絶えず自己を新たにします。何故なら全くこれらの二つの力の間には、その底に決して矛盾が無く調和が生じていて直接的な生活の中で屢々保っているからです。小説家はド・レナール氏やセザール・

ビロトーの例でお分かりのように、決してそれを無視しませんでした。前者は彼の妻を疑わしく思う時でさえも、彼女にまだ相談したいと思います。後者は妻を良く信じなければならなかったようです。少なくとも熟考に目覚めるや否や、男性と女性のどちらかが器用な動物から生じるようにその構造や思考が低次であるから無関係であるように、相手を理解することなく驚嘆するのは不都合が無い訳ではありません。百科に亘る教育は、コントが男性にも女性にも同じ様に望んでいて、同性の歩みそのものを各々により良く教えることには二重の喜びがあります。男性は諸科学、女性は詩人と道徳家たちが次々に教える勉強による歩みです。そして、それと同時にお互いが、相手と反対の効果によって唯一の精神を組み立て直すために助け合うことにも、二重の喜びがあります。しかし、経験に結び付いている性質が両性の各人を固有の勉強や、固有の思考の中で確認することには事欠きませんので、その性質が支えないものを特に注意しなければならないと私は思います。そして、男性が詩人たちの優雅さによって精神の要求をより人間的により良く理解することに連れ戻されている間に、男性の領域である外部の必然性を何よりも理解するために科学によって女性を導かなければならないと私は思います。両性はお互いに結ばれて仲良くなります。それは、コントが如何にして実証的科学から出発して〈人間性〉や諸宗教の秘密の全領域を発見したのかを説明する処では決してないのです。それに外にも道は幾つかあります。勿論、相手と反対の歩み続ける女性の精神にとっては恐らくより一層自然です。科学と神秘学を一致させるものであり、あるいは〈学校〉で言われているように、自由と決定論を一致させるものである人間の問題は、結婚と同じものであるのを私は注目し続けます。子供っぽい愛が反故にされたにも拘わらず、真の会話は男性と女性の間で続けられ、人間の英知というものを前提にしているのは明白です。沢山の無謀な試み、沢山の短絡な考察から生まれた悲劇、そして夫婦の沈黙でさえも屢々そのことを十分に証明しています。他人を理解するために注意して聞く熱心さは、それと反対の活動が十分にそれに応える時、最も極端でそして多分唯一の思考の事例を与えていることを言わなければなりませんし、繰返し言わなければなりません。女性の忠告を必要としないのは決して男性ではありません。男性が大臣になっている外部の秩序に従い、夢想を調整する必要がないのも決して女性ではありません。結局のところ礼儀正しい社会のように、理由を良く理解しないとしても、完成された男性になるのを女性の裁判官の判決に依存しながら、手探りで常に予感した精神を救済するのは男女なのです。（完）

二 母と子

今から述べるのは本当の男女のことで、社会全体の典型です。先ず始めに述べるのは子供が如何なる隠喩でもなく、観念の宗教から降下して存在に到着した本当に夫婦の結合したものであるということです。存在は理由無しで済みます。従って父親と母親にしろ、そして常に数々の理由によって分離された何ものかは、争いには幾つもの理由があるので、二人の性質が子供の中で結び付いて一つになっております。この結合によって生命が貯えを取り戻しているのは、やはり本当です。子供というこの強い和合は、父親も母親も各々が相手と自分とが混じり合っているのを認めます。分離出来ない二つは単なる和合を決して勧めず、事実や発展の中にそれを示します。従って、もしも継続しなければならないにしろそうでないにしろ、熟考は、熟考しないで日増しに発展する必然性によって乱されます。冒頭の男女がその様にして注意深くなって置き換えられ、彼らの共通した意志は仕事にかかります。以上のことからその後続き、そしていわば操縦する切迫さは、出来る限り後に引き返すことなく乗車しているのであり、それは忘却と許しの毎日を、前日の経験で覆いながら子供の成長が示していることです。

発展して行く仕事は、工場や商店や農地のように、存在することが可能だったかもしれないものや、今でも存在しているものについての非生産的な議論を行わない特権を持っています。何故ならこの存在は待ってくれないからです。そしてその意志は、選択することの可能性や継続するための警告によって、ついに本当の取得を見出します。仕事というものはそれ故に、それを生む者の発展を現実のものにします。そして何時も曖昧で、不平を言っている自己についての沈思黙考を行わないで、全く別な風に自分自身にその発展を表します。それは芸術家の作品に観察されるものでもあります。何故なら他人の独創を追い払って、その作品は真の独創を頼んでいて、作られたものを救っているからです。しかしながら芸術作品は大変早く何度でも創り直されます。そして何度も壊されますが、それは粘土の労働の中で把握されるものです。彫像師の大理石は大変上手に抵抗して、彫像師自身に大変上手に還元されます。もっと正確に言うなら、それは構造物です。芸術家は職人であればある程、より一層上手に逃げ出します。従って作品が自然や仕事や契約や四季の中で捉えられれば捉えられる程、もっと上手に作品は構造物を望んでいることを支えます。産業や商業や開墾による全ての錬金作業は、その様にして粘り強く行う義務によって偉大な性格を養成しました。子供が、この上ない作品で少しも期待しないこの素晴らしい成長によって、全ての人々の中で有益な作品であることを理解させるには、これらの要約された指摘で十分です。男女の実際の思想は、この元気な経験によって常にこの対象に戻り、拒絶出来ません。夫婦の愛は今では一つの事実です。その共通の人生が生き生きとしたものになっています。心からの結び付きは、それを望んでいるかいらないかによってしか壊せません。しかし子供による実際の結び付きは壊せません。そのことによって少なくとも決心しなければなりません。結婚は行為です。二人の混合した性質の破壊によってしか解消させることが出来ません。子供によっても離婚は判断されますが、不可能であるとも判断されます。各人はそれらの結果によって十分に感受します。しかし、それらの結果の中に隠されている真実は、ここで夫婦の持ち寄った財産は分割することが出来ないということです。そして夫婦がそこに入れたものである子供から、一

人ひとりに引き出すことも決して出来ないということです。それも一つの行為です。そして、それは何らかの一つの行為です。子供のいない結婚は、未だ一つの行為ではありません。誓いによって救済しなければならない一つの観念でしかありません。そして実際の観念を変えたり変更出来ないことが、感情を支えるための最も正しい人間の努力でないとしたなら、誓いとは何でしょうか。もしも誓いだけが理解したり許したり成長させたり成長したりする義務によって、愛を発展させるということが真実であったなら、より一層明白に子供の存在はどれ程議論の余地が無いことでしょう。そして夫も妻も、各々があらゆる点で人間であり、自分にとっての最良です。そして自分の真実であるものを発見する唯一の方法であることに固執するための理由を、どれ程見出させてくれることでしょう。ここでは夫婦の上に子供の反応が示されます。広大な観念ですが、それは十分には発展させられないものです。しかし、外の関係や最良の人間や規範や全ての人間感情の源泉全体を、先ずは発見しなければなりません。

子供が最初に応える母親の愛とその優しさは、完全に生まれつき所有しているに違いない唯一の愛です。何故なら二人の存在は、最初は一人で行うしかないからです。共通して厳密で奥深い生活は、一方からもう一方の只中でゆっくりと成長したものであり、結局のところ最初は動物的な状態にあります。ここでは比べるものの無い一つの社会を作っています。それは一人の中に、二人の存在を形づくりに行くものでは決してなく、反対に二人の中に唯一のものを形づくっています。自己愛着は、他人のために持っている愛情と最初は区別されません。コントはその点に関して本質的なことを言いました。第一には、殆ど愛で無い自己愛は強い感情です。そして生活することで拒絶することがなければ、拒絶することの出来ない極めて自然なものになります。次に万人に認められている義務や、至る所で尊敬されている申し分のない人のように、ぼんやりと抽象的に理解されている他人の愛も社会が自然のように、自然でもあります。しかしそれは私たちを、私たち固有の存在に結び付ける力強い本能と比較すれば、認めたくないのですが、常に非常に弱いものでもあります。そして私たちは、その他人の愛を荒々しく持ち続けるものでもあります。幸せなことに自然は、自己を愛することから、自己に似たものを愛することへ導く道を私たちに示しています。既に、夫婦の愛は少なくとも愛と言って良いと思いますが、それは思考する動物における欲望のはね返った結果によって、一人の幸福が直ちにもう一人の幸福に支配され、同様にお互いの間で矢のように魔法のしるしが飛ぶや否や、最早分離することが出来なくなる生物学的特性を与えています。ここでのエゴイズムは、崇高な観念が先ず奪われているこの血による力を愛に伝えています。私たちは愛することを覚えなければなりません。そして愛の経験は肉体へ進みます。そのことが最も寛大な思想に糧を与えます。しかし、この養成は未だ私たちのものになっていません。母親の愛は、自己の未開の愛と、決して選択されずに許す必要もない崇高な愛との間で、より一層直接的な伝達を切り開いています。

ここでは数々の観念が押し合っています。この大きな主題が論じ尽くされることはあり得ません。それは少なくとも聖母マリアや、神の子キリストの神話として、あらゆる神話よりももっと先見の明が十分にある自然な感情に従った信仰として、そして画家や彫刻家たちが礼拝となっているこの母親の注意力に委ねることなく表していた数限りないイマージュとして、全てが集められています。更に、最も自由な活動としてあるのかもしれないこの子供っぽい信頼が、自分自身の存在に投げ返されてそこに隠れています。ここには愛に関しては全ての申し分のない人々が

おります。というのも決して選択しませんし、選択するのを考えることさえないからです。寧ろ願っていますし待っています。もっと適切に言うなら、手助けしています。絶えず手助けしています。更に、それが何であるか知ることのない他の贈り物は少しも進歩しないのに、喜びながら自由や権力のしるしもないのに驚嘆しながら、他者が成長したり幸せであるのを見ることで十分に報われる全ての人々を、その内実によって養っています。確かにそれは今日的なものでしかありません。不機嫌は何時ももぐもぐと不満を呟きますし、自然には決して十分ではありません。如何なる場合でも自然には二番目の熱意しかありません。従って女性の愛というものには、そして模倣によるあらゆる愛には、何か母親的なものがあります。同じく思い出によると、私たちが一番目に愛するものの全てを学ぶのは母親です。

子供は与える以上のものを最初に、そして何時も受け取ります。勿論、この状態は決して親孝行を制限するものではありません。何故なら受け取る以上に与えることを愛してそれを良く行う人間は、受け取るのを学ぶ以上に心の教育にとっては重要な部分であるからです。そして、私たちが感謝という美德を創り上げたもう一つの寛大さは、更にあらゆる社会で何よりも重要です。子供は先ず最も完全な形で感謝を学びます。何故なら、それは元気で幸福であることが第一であり、丈夫であることが第一であり、有難うとお礼を言うことであるからです。その源である感謝は屈辱を否定します。そこから私たちは、困難な生き方であっても何時までもこれらの学習を引き寄せることでしょう。『善行』の書は再びもう一度書かなければなりませんし、母親の両腕の中で座る子供の生理学によって何回も始める必要があります。そこから理解されることは、恩知らずの罪は何時も、少なくとも幸福でないことにあります。完全な姿の善行はより一層自由で力強く、存在しなかったことには従属しないで受け取る者を表現することにあるということです。最も偉大な画家たちによって何度も沢山描かれた子供の活動は最も小さくなり、これらの観念や外の沢山のものを表現しています。そこから私は、次のことしか考慮したくありません。何故なら屢々忘れられるからですが、それは友情そのもののように、愛そのものに応える最良の方法は決してないということです。幸福であること以外に、外に方法が無いということでもあります。そして、その様なものが優雅さの中に感謝をつけ加えているニュアンスのものになっているのです。

母親とその息子は、この自然の社会では完全なものです。ここでの現代の神話は全てを表現しています。そして、神の子キリストの大胆なイマージュによって人は何でも言いたいのです。母親と共に外の愛と反響させることによる母親のこの尊敬のニュアンスは、乗り越えられない力を生んでいる助言者の中心として連れ戻しているのであり、それは服従の意志です。小さな人間は既に丈夫に出来た門を持っている者であり、いずれにせよそれは素直に命令するためのものです。前もって女性の心は、心が導く全ての戦争を自己で許していますが、力が署名をしていることにより、余分な大砲の一撃さえも許しています。母親と娘の社会においても、外に数々のニュアンスがあります。義務と苦難の親密さによって、多分思いやりは思った以上に少なく、それに反して繊細な相互理解と、より一層内面的な結び付きと、同じ様により一層確実に管理されているものがあるのです。（完）

三 父親

父なる神とは第一に驚くべき隠喩です。父とは自己によって、もっと正確にはその延長によって結び付けられた力です。それは重苦しい事物の全体であり、完全なる行為による厳格さです。室内全体や、母親や子供たちや、事物そのもののさえも慣習と愛情を表し、再開と十全を表しています。明日も今日に似ているだろう、と全てのものが告げています。しかし大臣とか馬車屋とか樵とかであるかもしれない父親は、世界に彼の航跡を作りました。その航跡は彼の一日の戦いであり、決して望み通りのことでなかった事柄を別にしても、そこで行動する沢山の人々と出会い、そして変化を与えました。その大きな摩擦は、労働の重さと時間の代価が生むものです。大都会の十字路に見られるように、雑踏と喧騒の労働の世界においては遅延があるだけです。それらを一人の大臣が管理しているとは何という十字路でしょう。しかしこれらの場所が平穏であるのは、決して急ぐことの無い主義でぎっしり混雑した歩行をとっては何時も待たねばならないので、大変な偽りでもあります。実を言えば、一人ひとりの小さな主義が世界全体を引っ張ります。従って大雨は止み、そして地表が乾くのを待たなければなりません。だが、世界は非常に良く閉じられた、この手の行き届いた綺麗な家のように管理されません。ここでは労働が人間に従って決められております。一人ひとりを行うべきことを直ぐに覚えます。その様にして、そこでの統治は容易になっています。家族をテーブルに座らせることになるもう一つの統治は、外国人のように必然性で身を纏っています。その視線は気に入ることを考えるのを何時も拒んで遠くへ行き、そして壁を通って行きます。子供は、その立場では祈りによって全てを手に入れることにあります。もしも何らかのことが拒否されたなら、子供は人が余りそのことが好きでないのだと自然に信じます。この子供っぽい術策は恐らく、大人がこの世界で最も理解しないことです。女性の中にはこの子供っぽさが少し残されていて、そのことによって女性は管理そのもののの中で常に告発します。そして当然のこととして投げやりになり、やる気が無くなります。奉納や約束や希望に大人は答えることが出来ません。この術策そのものは決して答えるものではありません。その使命は人から好かれることではありません。もしも彼がその使命を知らないでいるなら、子供の儘なのです。その存在が労働も無く保証されているか、特別待遇に単に依存されている場合には、その目を見るかもしれません。しかし、それらは稀な場合です。抽象的でさえあり、永続性があるものでもありません。その時は沢山の原因の中の一つです。それは家族の心が気の弱い判断力や狂ったような希望の中で、自分を見失うようなことが起こります。それは常に、この世界との摩擦における労働や仕事が数えられる程に余りに少なく、そして成功も失敗も子供たちの方法に従って、気分とかご機嫌による好みに専ら依存されているのです。通常の場合、父親は遠くを見詰めるパイロットのような者で、決してお喋りのことを気にかけません。中身の無くても楽しいこの種の会話を、お喋りと呼ばなければなりません。そこでは共感、反感、人間味のある心の動き、性格や気分による奇抜さが、主な対象になります。この様にして二つの歴史を持ちます。一つは、女性的なもので逸話的なものです。そこでは全てが結局のところ気に入るか、気に入らないかに尽きます。もう一つは、男性的なもので全てが労働や仕事のことに尽きます。歴史家がお世辞を言うことを本職にするなら、簡単に間違えます。しかし普通の人

間は、地位が高くても低くても労働の中で、そして労働によって必然的に生活します。彼はなかなか実現されない計画や企画に、やっとの思いで耐えます。恐らく彼は、正確な要求に苛々しているでしょうが、正確なものしか望みません。他のことは全てどうでも良いのです。何故なら人が同意したがっていることを拒絶するのは辛いからです。結局のところ彼は、全てがこれらの行為によって統治されている政府なのです。彼は権力者です。彼は、恩とは無縁の仕事を行います。そして常に理解されず、愛したり気に入られたりする権利を持ちません。そして選択することは決してなく、常にやりたいことだけを行う役目を与えられています。この政府と世論の間のこの自然の対立によって、家族の平和は屢々危うくされそうになりますが、その結果は何時も大したことはありません。幸いなことに経験が教えてくれることは、本当の愛がここでは奇跡を生むのです。一方で、男性は女性の理屈に容易に引見しますが、実を言うと本当の主張は何時も少しばかり外れています。その代わりに数々の性格に観察される魅力によって、男性の労働を楽しくさせます。男性が男性に関心があるのはそこを通過することです。他方で、女性は宗教への敬意として先ず男性の労働にも献身しますが、屢々実際の利益や困難を解決する何ものかにも達します。信頼に溢れた中で、この空想的なものと実証的なものとの交換があります。そこでの各人は各々の言葉に愛のしるしを発見することを知り、際限がなく魅力的な維持と、野生の愛から最も美しい友情への幸せな移行を説明します。

この闊達さは、父親から息子までの関係において決して同じものではありません。子供は数々の思考により、母親よりも父親から遠く離れています。自然の生まれつきの感情がここでは露骨ではなく、強くもありません。先ずは分割出来ない厳格な生物学的存在の結果である活動の調和によって支えられることがないのを除いても、遠く離れています。父親の仕事は、いずれにしても子供から離れています。その代わりに母親の仕事そのものは子供に接近していて何よりも肉体的に多くのことを行います。従って、母親の最初の注意は乳児が表したいことを見抜くことにありますので、精神的です。父親はそれ故に、子供たちには少し門外漢です。そのことは男の子供たちにとっては成長するにつれて、恐らくなお一層そうなのです。何故なら労働の必要性から男性の決まり事は、幼年時代そのものを時々忘れて消すことであるからです。同様に男性は思い出を持っただけ、特別待遇とか好機とか幸運に関する空想的な精神による全ての間違いを自然に考えるでしょうが、彼の息子はそれから顔を背けたいと思うでしょう。しかし、歳を取ると意志に支配されなくなって、熟年齢者の経験が若者には理解されなくなります。父親の特色の一つは、自分の息子にも父親と同じ様に厳格で真面目で積極的であって欲しいということです。

この指摘は既に余りに酷い逆説を表していますが、それは次に述べるように父親は息子を教育する術を知らないからです。但し、この困難な問題をもう少し明らかにするには、アリストテレスも言っているように、簡単に圧制を加える活発な感情に分け前を与えなければなりません。父親の希望は気高さであり、感動です。父親は自分の息子に、改めて青春と未来の豊かな自分の姿を思い出します。父親が行うことの出来なかったことを、息子が行うのです。父親はそれ故に老い始めたが、時間が欲しいのです。父親は間違いを認めません。何故なら自分の息子を、父親自身と比較するからです。自分の息子を、同年齢の若者たちとは比較しないからです。学校の先生は、他の多くの子供たちや若者たちとの比較から数々の間違いを判断しますから、父親よりも優位にあります。人は各人の年齢に相応のものを要求し、期待し、希望することが出来るのを学

校の先生は知っています。先生は、自然が準備している突然の奇跡的な進歩を忍耐強く待ちますが、それは急速に増加するものです。しかし全ての学年にあっても学校の先生は、既に他にも優位にあります。それは自分自身の子供たちを愛するように生徒たちをずっと愛さないことです。従って生徒たちの多くの思いやりも又期待しません。忘恩という陰気な様相を若い年齢の無頓着さに与えたりしません。ところが父親は愛情を測定するかの如くにどんな仕事に就いても、どんな注意力を払ってでも劇的事件を生み、そして更に学習にはもっと有害な和解を行い、行為には決して事欠かないことになります。

息子としては、常に気持ちの証拠を探しながら愛情の術策を、父親の権力の面前で適用することにも事欠きませんが、それはどれ程までに人が立腹出来るのかを屢々観察するように導きます。何故なら、息子は愛しているからです。愛されていると感じてもいるからです。勉強とは別のやり方で、厳格さに勝ちたいのです。もしもそれに成功しなかったなら、息子は苛立ち、直ぐに本当の絶望に陥りますが、それらの表明も自然と曖昧です。活発な情熱も無く、勉強が忍耐であり、間違いが年齢に従って吟味されて本当の怒りも無いのは、学校においてしかありません。学校と家庭との対比が大きな主題になりますが、大変に新鮮なことです。父親と子供たちの間の感情の絆は、母親のとりなしが無ければ容易に形づくれないことを、私は何らかの観察によって単に示したいのです。そして、二重の模倣にここで気付かなければなりません。父親は、母親の幸福が彼女自身のものでもあることにより、自然と母親の感情を模倣します。それ故に父親は、母親に対して感じる愛に従って、母親が感心する時にも感心するようになり、母親が許す時にも許すようになります。何時も最良を仮定しながら、そしてその期待によってそうなるように、本当の思いやりに従って申し分なく子供たちを愛するのを父親が最初に学ぶのもそこからです。父親が、母親たちの技術である密かに準備されるこの技術に、決して到達しない訳ではありませんが、母親たちの技術は比類の無い忍耐と信頼によって乳児を、言葉や、最初の観念や、最初の美德にまで育てます。今はコントの最も美しい言葉の一つを私は引用しなければなりません、良くは知られていないものです。「屢々人は盲目的になる愛を非難しながらも、憎しみがまさに愛以上のものになることを忘れているが、それはより一層致命的な段階である」。男性のモラリストたちが、ここで余りに脆弱で月並みな思想を支配する術を知らなかった事実は、もしもその事例や母親の愛の伝染がそれを明らかにしなかったなら、人間の精神が幼年時代を前にしてそれらの限界を直ぐに発見するのを良く示します。しかし、もしも感情が行動するだけに止めて、決して表現されることがないなら、私が言ったように理解する光が不足しているのです。

他方で、息子は母親の感情を、取分け幼年期には自然と区切ります。そして同様に母親が尊敬と義務と世俗の長と同じ程度の愛を明らかにする範囲内で、子供はそれと同じ種類の感情を生み出します。その感情は、美しい混合を生み出しながら、人間であるために持っている野心と、何ものも逸らせることが出来ない感嘆と共に、次々に作られています。しかしながら、もしもこの感情が力強さに欠けていたなら、夫婦の愛も又欠けていたと考えなければなりません。その上、それらの感情はお互いに多くのやり取りによって組み合い、反応します。何故なら母親は、子供たちを従順に育てる考えによって、父親への尊敬を示すのにより一層注意深くなるからです。そして母親が何時も父親の名前を出して命令する術策は、より一層巧みで美しいものでもあります。

親孝行の問題については、それが追悼と命令されている自然な信仰によって、美德そのものの管轄であり、人生そのもののためでもあることに気付かなければなりません。しかし私は、少なくともこの偉大な観念を素描するだけに止めなければなりません。実際に、年齢の相違や世俗の長の立場によって必要性に従ってその時は命令されて、感情に従っていないので何時も厄介です。そして結局のところ父親に固有のものである、辛抱しない厳格さによって、息子は自分が望む如く感嘆する状態では多くの場合自分を見出しません。年齢による弱さは、子供が最初に父親によって形づくられた、美しいイマージュを変形させるのに既に与えています。死には、全ての感情を最初の状態に戻る特権があります。死によって精神生活が始まる、とヘーゲルは言いました。それは一つならず多くの意味に理解出来ます。少なくとも私はここで、如何にして信仰心から観念を創るのかを見ます。惨めなイマージュが消えると、子供が大きくした昔の崇拝の感情は遂に対象となります。本来は伝説的である物語とか思い出によって構成された生活の中に、その観念を加えさせます。この美しい仕事によって、子供はそこから受け取ったこの莫大な信用を両親に与えます。同様に、両親は全ての力を子供の裡に想定し、幾つものしるしを窺っていました。しかしながら失望しないためにも、あるいは少なくとも連れ戻された全てのもののためにも、発展するこの生活に十分な主人たちがいることもありません。同じく大人になった子供は、信仰と同じく子供を悩ませます。しかし彼は神の死によって完全に成功します。時間とは、取り返しのつかないものであると言われます。それは、次に来る時間のことであって過ぎ去るために来るものであるのは本当です。私たちの関心事にその原因が圧力を加える時に、それは事実になります。しかし、既に遠い過去を自分自身の精神に読み取る時、その生活が潮の如く既に昔の出来事を覆って仕舞った時は、過去はその反対に感情に従って償うことが出来ると言わなければなりません。従って、息子とか娘に無かった品位や潔白さや英雄的なものは、最早遂に彼らは想像しませんし、彼らの世界には無いのです。歴史への用意によって、そこから齎されるのは名高い家族の偏見であり、そして名前の重みです。身に付けているのが常に困難です。私たちは、祖先が農奴で、何処の馬の骨か分からず、平凡で、何時も思想が無く、秘められているかの如くであるとは決して信じたくありません。この偏見は親孝行によって支えられる時、取分け最良に支えられずに空しく残念に思っ出発する時は、決してそんなにも強くありません。私たちが形づくるこれらの典型は最も自然なものであり、恐らく独自のものです。その崇拝の結果は一人ひとりの裡に深く隠されています。それは偉大な人物たちに関しての一般的な講演で示しております。綺麗になっていますが、抽象化されていて少しも有効ではありません。明確で拭い難い思い出を一人ひとりが如何に解釈するのか、判断力と確かさと鋭敏さと魂の偉大さという特色が、最後には一般的であるが、一般的よりも悪い証拠で如何に描かれるのかが稀ですが確信されます。いずれにせよ、どんな人間にも人間の輪郭に関するこれらの観念は、家庭の神々のものです。その実際の思考は神々への祈禱であり、祈願でしかありません。私は、高利貸しの息子にも同じことを言います。多分、彼は高利貸し自身でもあります。それにも拘わらず彼は出来事以上に何か控え目な規律に従っています、それは何か宗教の慎重さです。ウジェニー・グランデ(1)は、彼女の父親が死んだ日に、今度は彼女の番でしたが、父親と同じ口調で言いました。「私たちはそれを後で知るでしょう」。吝嗇のその一寸した人物は救われました。清潔で力強い一寸したこの人

物は、この時重要になり始め、名付けようのない美德があつて、全く自然に近く、彼女に適合するに相応しかつたのです。その意味において、コントはこの有名な言葉を聞いても屢々信用せず、死者たちは生者たちを支配しているのです。それは、ここでは生来からの遺伝ではありません。寧ろそれは、薬なのです。（完）

（１）ウジェニー・グランデは、バルザックの小説『ウジェニー・グランデ』（一八三三）の主人公。

四 家族

ここでは一つの素描しか見付からないでしょう。しかしそれは、観念の根っ子のようなものである下層階級を忘れさえしなければ、極めて遠くへ行くことが出来ると十分に理解させてくれます。それは既に、社会学が生物学に依存しており、そして生物学としては物理学と化学という科学に依存しているのを良く思い起こさせますが、一貫性に欠けたコントの観念でもあります。この二重の観念を取り戻しながら、そして私の主題に出来る限り近い観念を把握しながら、私は家族の輪郭を描くの気を付けました。しかしそれは動物の性質と、外部の必然性という二つの強制に従った基礎的な社会です。この二つの条件は夫婦から夫婦へ、母親から息子へ、父親から息子への関係を明示するものですが、精神の社会という抽象的な法則によれば、余りにも良く反対のことを考えて仕舞います。まだこれから肉体の社会を簡単に考えなければなりません、それは全体としての家族であり、祖父母、両親、あらゆる年代の子供たち、召使いたちがそこに集まっているのですが、結局のところ家の中で人間的に結び付いているもの全員です。薄明かりのように更にそこにつけ加えるとするなら、義兄弟と義姉妹たち、伯父と伯母たち、従兄弟たち、親しい友人たちがいます。結局のところ、お祭りの時に集まって来る者たち全員です。全体で、ある響きを作っていて、独特な観念を生んでいます、他の如何なる集まりとも区別されます。ところでここで、もしも空想や逸話でないものにしたいなら、低次の条件を絶えず見詰めなければなりません。それらは決して屈服しないものです。

先ず最初に言わなければならないことは、家族の結び付きは選べないことです。その愛は第一に、選択する時が取り除かれます。決心をして、それらの愛情に合わせて観念を適合させなければなりません。この特性は子供たちが生まれるのに応じて、だんだんと示されて行きます。人は望んでも子供を持てません。望んでいるとしても、子供はいないのです。ここでは予想することも望むことも出来ませんし、受け入れなければならないことを両親の混交だけが更に保証するのです。もっとあります。時々は未知であったり、間違っ理解していたりする沢山の祖先が子供の中に戻って来ます。そして、それらの入り組んだ影響による通常の結果は平均的なタイプに帰りますが、それでも抗い難い個性を生みます。しかし先行することはなく、時々は反逆者にもなります。子供は両親よりも下になったり上になったりするものです。あるいは他の能力を示したりするものですが、選択されなかったに違いないものを愛さなければならないので、いずれにせよ精神は屈従させられます。思考する機能はそれ故に、ここでは門外漢になります。人が望んでいることを行うための観念は、壁の向こうの門の外へ追い払われます。ここで意志に反対するのは決して意志ではなく、それらは諸存在です。それ故に、家族の論理そのものに従っての議論は、直ぐにその特性に戻ります。従って存在する権利は問題になりませんが、思考する権利を無効にします。一人ひとは相手の気質を受け入れますが、それは相手に代わることでしかありません。そこから酷い悪口は家族において慣例になり、気質の働きの如く一つの見解になります。思想も、全ての種類の作り話も、如何なる共感も無く、何故ここでは孤独しか発見することが出来ないのかが分かります。それは一人の人間が、そこで評価されるのは余りに少ないというのでは決してありません。勿論、その人間は評価されているので、価値そのものが無駄ではないと

良く理解しています。仄めかすことは感情による大きな阿諛です。「お前が愚かで、不具で、手足を失い、見違える程に変わるとは」。それは一つの大きな阿諛です。しかし、それを確信するとぞっとして直ぐさま一種の軽蔑を抱きます。この種の英雄主義の反対は、虚栄心です。それは彼が最高に貢献した時でさえも、ここでは外部のしるしに従って、その種族の境界は見逃されます。そしてその中では全ての価値が下落します。一方の人が聡明でも、もう一方の人は不具者です。平等にする力は生物学的なものです。それは性質が低俗な愛に似ていますが、揺らぐことが無く、一人ひとは自分自身の肉体に所有しています。あるいはもっと適切に言うなら、一方の足がもう一方の足と同じに見倣すのを想像することが出来るこの種の愛にも所有しています。家族にはそれ故に天才がおりません。もしもそれを認めないなら、家族は尊敬するやり方によって再び彼を屈従させます。『諂う〈猫〉の家』における何らかの争いを人は見るでしょう。サン＝シモン⁽¹⁾にも発見します。そして、痛い処を述べたこれらの家族には如何なる分別も無く、全てを押し進めて行きますが、それは一人ひとりが或る集会で、あるが儘の自分の集団を押し進めているかの如くであるのが分かります。息子が父親と同じ様に価値があると信じられることはありません。それはまさに最悪です。それは如何なる人間の価値も少しも信じないということです。全てを受入れる英雄主義によって自己を見失わないようなもので、愛は常に悪戦苦闘しています。

この観点に立って家族会議の術策が理解されますが、その会議には如何なる熟考も無く、一種の皮肉によってより一層低次に術策自体を降ろします。その時、商人やメーカーや統治者たちの社会においては全てが実際の業務によって吟味されます。そして特別待遇と好機が、進展と評判と栄光さえも支配していることを、自然に集められた家族にもあるように見えます。そうして弱い精神を持った人々は、全てを期待し、全てを要求し、全てを望み、施す立場しか決して手に入れないで、それを生み出すためである自己へのいかなる尊敬が無くてもこの自負を、その人間たちの外側に全生涯を持っています。この種の不満分子は全ての大通りに満ちていて、全てのことを鈍らせます。この盲目的で要求の多い愛は、術策的關係を特別待遇と感謝の念で彩るものであると考えるのを、私は望むことさえありましたが、それは人がもう少し冷静に良く考えて欲しいことです。結局のところ多くの人は愛する術を知るように自分たちの祖国を愛するのであり、そこから一種の恐ろしい犠牲的精神を愛します。祖国は正確には家族ではありません。同様に、王も正確には父親でないのは極めて明白です。そして、祖国の概念に関するこの特有の分析は、実際の関連したものに従えば最も有益な仕事になるでしょう。

家族に関するもう一つの特色は、もしもそれが外部や併合された部分でないならば、私は決して平等のものを見ないということです。子供たちの年齢差、乳児期における全ての者の極端な弱さと依存性、急速な成長、そして同じく飛躍によっても絶えず変わりますし、一人ひとりには多くの状況があります。全ての人はその観念を相反する権利によって排除しますが、その観念が感情によって激しく否定されることは斟酌されません。以上のことから共産主義の制度は、ここでは自然なものになります。それは初期のものであり、恐らく唯一の優しさの制度ですが、盲目的感情が余り機能を発揮させられない社会には相応しくありません。祖国は家族ではありませんし、同じ国の人々も実際には兄弟ではありません、ともう一度言わなければなりません。ここには生物学的絆が欠けています。それは両親に対しての一般的な依存によってしか特に強くならない

ものです。更に母親のとりなしにもよるのですが、それらは両親が作り上げた実質でもあります。隠喩では元の組織体の統一性を取り替えることが出来ません。怠惰なやり方である類似点から思考するのは止めて、もしも家族と社会の全ての出来る限りの相違点を第一に描いたなら、多分もっとはっきりと見出すことでしょう。ここで私たちは一つだけ言いますが、それは家族が権利を激しく否定していることです。そのことは子供たちの喧嘩の中にまでありますし、家族が本当でなくなる瞬間そのものです。その時に成長する生き生きとした情熱は、権利という生き生きとした感情からは全くやって来ません。反対に権利の要求は、感情への罵詈雑言として受け取られたものです。

あらゆる部分で十分に明らかにする手段が見出されるのに、何らかの困難があるもう一つの相違点にも又、気付かなければなりません。人間の生活圏においては情動と、その反動としての礼儀正しさは、顔付きと顔付きの間で演じて見せます。全ての人々は更にもっと低次へ降りたがっています。何故なら、最も臆病のしるしに倣って人が敢えて言うことを調整するのと同じ様に、最も無知であるとか、最も愚かな力について人が言うのを調整するのが、人間性であるからです。あらゆる努力にも拘わらず、やっと成功した後では、どんな会話も全て低次に降りなければなりません。その結果はまさに家族の中で、もっと注目すべきです。それは反対に何時も感情の暴君によって非常に欠いている礼儀正しさの結果ではなく、寧ろここでの低次が全ての家族を調整するからですが、食料とか飼育とか掃除とか、生活へのしがたい気懸かりによるのです。気質が如何に意見よりもより良く受け入れられるかは、既に説明されました。私たちはそこから生物学という奥深い原因を今は知りましたが、病人とか乳児とか産婦への気懸かりは目的や行為をここで決定するからです。そして、それらの気懸かりが気分や、子供の叫びや、病人の嘆きによって表現されます。この余儀ない統治は、顔付きの治安に従って危機の時以外にも続けられますが、それは頭痛とか吐き気という目印によって何時も異議を唱えます。従って一人ひとりとは拒絶するには強いのですが、同様に提案するには弱いのです。そこから屢々沈黙があり、そして無の観念があります。ところでそれらの原因を説明するのは、何でも殆ど不可能です。より一層広い社会で思想が目指すのは、決してそこでないのは確かです。私は最も低次元であってさえも、驚嘆したり、美しくなったり、単純化したりする情熱に注目します。その情熱は大衆小説の成功を意味しますが、感情と思考による高尚な人生は生物学的な必然性によって大変良く切り離されています。再び上昇するなら、優れた作家たちは信じられない位に読まれますが、平凡な作家たちは常にそこから何らかのものを共にしている、とつけ加えて言うことにしましょう。取分け、大人物や聖人や英雄への崇拜は増大して行きますが、如何なる節操も無いのは人々が彼らを見る距離が長いからであり、彼らと同じ様に私たちにとっても、肉体の重さを忘れたり精神から分離することが幸福であるからです。この行いは、社会においても家族の記念と殆ど同じ結果を生んでいます。しかし、この記念が常に最良に事が運ぶとは限りません。その代わりに、この行いには常に政治上の意見の対立が混じり合っていて、殆ど一種の憎悪と無知による不公平が無く進むことはありません。いずれにしても公的生活は、口頭弁論や裁判と同じ場です。弁護したり、説教したり、語ったりすることは、全てが私たちに観念の規範を与えます。彫像や寺院は、もっと適切に言うなら、納得させています。しかしながら思想の本当の学校は社会とは別の、介在者として

の学校です。家族という社会と同じ様に、まさしく政治の社会とお互いに対立します。それは、本来のものとしての見方からは遠く隔てた崇拜によるものであり、美しい言葉への威光によるものです。要するに常に少々未開的な家族は、二つの側面から文明化されていると言えるでしょう。家長の政治的情熱と交流によるにしろ、〈人間性〉によるにしろ、それらは子供のノートにくっきりと浮かび上がり、我が家の神々に混じっています。そして、その様なものが本当の夕べの学校になります。

言葉は、私たちの思考を持ち上げるのに少しも貢献しません。逆に短縮、統辞法による下落、結局は暗示によって私たちの思考を腐敗させて、感覚を無くして終わりにします。そして、些か閉鎖的な家族の中で、声のしるしを良く聞く者は原始的な言葉の何ものかを取り戻します。古代からの愛の言葉は、その起源が屢々忘れられる異名であり、乳児の発音や乳母の方言や親戚の農民のアクセントに混じり合っています。そしてもしもその言葉を、何らかのものを意味するために使用したなら、全てが理解出来ない訪問客や外国人のように見えます。しかし家族が使う方言は、全ての普通の言葉に似ていて、身振りや手振りを使わないと最早何も表していないので、何時も大変に驚かされます。耳が聞こえない人でも殆ど大丈夫でしょう。あらゆる言葉がそうであるように、家族の言葉は詩や祈りによってしか動物性を超えて維持されませんし、高められません。それらは音で出来た彫像です。そして私たちが観念を如何にして形づくるのか、それは課せられた言葉次第です。〈聞くこと〉とは大変に高められた一つの言葉です。

洗練された社会の表現も、従ってその表現が望んでいる以上のことを言っています。礼儀は外部から内部まで素早く進みます。何故なら情動の感情を和らげ、更に情熱の感情も和らげるからです。礼儀は人が言うことを十分に知るための明白な状態によって、観念を準備することさえあります。あらゆる愛にとって、軽率さそのものは一種の悪口の如く礼儀正しさを拒絶します。そこから最早情動しか表さない一種の言葉遣いが齎されます。その様にして愛には、詩人たちが大いに必要とされています。同じ理由から家族たちの感情は、殆ど表現されることがありません。反対に、型通りの言葉が十分に不機嫌を示しているが如くに機嫌は自然と悪くなり、一定のやり取りの対象になります。言い過ぎた言葉になりますが、いったん労働や商売が家族から分離されるようになると、辛辣で時には粗野でさえある人生になります。そこから齎されるのは、事物への影響力が敬意を決める農民の家族が、一般に労働者の家族よりも文明化されていて、工場の制度によれば既に労働から分離されています。そこからは宗教や風習にとっての大きな結果が予想されます。もしも、それが生理学に関するあらゆる研究に仮定されなければならない如くであったなら、神を生む規範になります。家族というものは友人たちによっても文明化されます。しかし、屢々最良を愛する者たちは、未開の種族によって苦しめられる如く、本当の感情の術策に従ってわざと用心深いのを軽蔑することになります。商人とか政治家たちの家族は、必要とされている一種の友人たちによって上手に決められていて、決してそんなにも愛されていません。

勿論、政治の社会や偉大な仕事による人間性によっても家族についての反動は巨大な主題を生み出していますが、その中に私は入ることが出来ません。その家族は、家族そのものを調整することが出来ません。そのことは最も自然で力強い感情が何ものにも十分でない、と言うに帰すると理解するだけで十分です。情操の感情による安全性さえも、屢々克服するに困難な外見に基づいて表現することで生まれます。人は多くを願いますので、失望は屢々嫌悪の顔付きになります。

。かくして父親の愛は、節度も無く時々厳格になります。そしてその答えとして、子供は憎しみで武装したような様子を見せるようになります。それでも和解が遠くないこと、そして既に和解されていることさえあります。事態が最早それ以上悪化しないことを誰もが知っています。愛することの確信が、愛されることの確信よりも更に一段と大きくないか否かが自問されます。自尊心がこれらの葛藤による激怒を伴うので、怒りによる数々の害を優しい愛情がすっかり修復することは一度もあり得ないかもしれません。これらの危機を経験することによって、退屈とも思わないで自分自身を罵るような沈黙に達します。人はここで表面的な誤りしか発見しないので、美しい言葉が全ての人々にとっては殆ど十分です。祈りの代わりに詩人たちが共同して行う朗読は、最も率直な即興が何時も本当の真実ではないことを、有効に全ての人々に思い起こさせていると考えさせるかもしれません。その上、ここでは全身への従順よりも左程重要でない言葉の意味は、注意深い暗誦を伴っています。慎ましさや忍従や他者への許ししか求めない祈りは、求めることだけで手に入れるのは明白です。〈聖書〉は不思議な混合です。屢々荒々しくて非人間的で、至る所が殆ど不可解ですが、読んだり暗誦したりする習慣によって、それでもなお沢山の家族において善良の特徴を残しています。それは息の根を止める何ものかであり、その暗示がまさに私たちの全ての観念や全ての感情でさえも台無しにしているのかもしれません。

これらの考察は大変容易に次に進めます。人間感情の学校として家族を捉えているコントの奥深い観念に従って、もう一度それらの考察に向けることは少なくとも有益です。生物学的感情が他者の愛と無縁ではなく、そのことは母親の感情の分析は十分に疑うものではないことを、先ず最初にコントに倣って繰返し言わなければなりません。というのも、ここではその様にして自己の愛が他者への愛と混合され、その犠牲的精神もそこでは恐怖とか怒りと同じ様に自発的であるからです。それらの家族の感情も、肉体や血と同じ様に或る段階では強烈な特色を見せています。反対に道徳的な情操は大変容易に人間性全体にまで広がっていますが、低次の情熱に対しては殆ど常に有効ではありません。何故なら、心の奥底から深く混合されることがなければ、情熱は唯一やり遂げることが出来る動物的な力を決して受け入れないからです。それ故に最も高尚な美德は、非常に一般的で至る所で尊敬されていますけれども、現実には如何なる変化も無い願いしか生みません。如何に現代の哲学者と同じ言葉を使用しても、私たちの最も卓越した情操の感情であっても自然にも少しも役に立たない状態に置かれます。それ故に情操の教育は、家族の感情から社会の感情への段階的移行によって、一種の輸血の中にあり、結局のところ人間的なものです。その意味において家族は社会全体の規範であり、一般的社会は人間的なものと同じです。

その代わりに家族が、家族そのものに閉じ込めるや否や私が何人かの女性たちを説明しなかった幾つかの原因によって、一種の非社交性へ容易に戻ります。援助に関する全ての手続きは家族を文明化します。しかしながら、家族を弱らせることなく実際の犠牲的精神を広めるのに非常に綺麗に示している祖国は、コントが祖国から期待し、前世紀の中頃から既に生まれているのが分かった人間性への容易な移行を、全て私たちには決して与えておりません。それらの諸原因は混じり合っていて曖昧です。しかしながら、総司令部第一地区の最重要資料の中でピュールフーが気付いたことは、極めて自然に崇高へ赴く国民感情においては、必然的にその主要はまさに恐ろしい戦争というゲームに投げ込まれた者たちと、家族の一人ひとりとを結び付ける肉体への愛

着であり得たことです。大変に単純であるが新しいこの観念がここでは十分である限り、この観念は統治者が大変上手く行動に移すことを覚えますが、規制することを知らない一種の暴力を説明しています。その様な分析がどれ程困難であっても、私たちには国民感情の中に容易に思い出すことが許されています。どんなに形を変えていても、家族の中でのこの権利の否定は、感情と同じ力を生じます。従って戦争を生んでいる情熱という暴君や逆上によって、戦争は兄弟殺しの喧嘩に似ています。しかし戦争は、次のことによって異なります。野心的な隠喩を無視して、異なる国の人間たちの間には、この強くて自然な愛情は決して見出されません。それは家族の中では殆ど何時も競争に対して良く効く薬です。その薬は、君主制において推測したい父親の感情に似た国民の同胞愛のものです。これらの隠喩的な感情は、要求しても報いません。例えば家族において、父親の思い上がった恐るべき行動は、性格や現代性との関係によって、先ずは節度あるものになりますし、母親のとりなしによっても同じ様になります。他方で、子供の反抗は抑圧されていると自ら思いますが、年齢のお陰で解放される希望が十分に保証されると考えなくても、同じ様な理由から穏やかになります。君主制的な状況においては、その様なことは何も理解されません。そこで感情が満たされないことをこれらの指摘に従い、そして多くの経験によって人は理解します。それらの感情は生物学的性質から大変に分離されます。同属という理由から既により一層形づくられているとはいえ、感情が国家間に未だ十分でないことを恐れるのは当然です。研究者たちの注意力に目覚めているためには、子供たちへの家族の愛情が、最も荒々しい興奮にまで愛国的精神を齎しています。そして確かに卓越しているが比較的極めて弱い人間性の感情においては十分な抑制が見出せないことを、ここで繰返し言いましょう。従って、〈家族〉と〈祖国〉と〈人間性〉という一つの連続は、継続した発展が許されていません。そこには一つの言葉が欠けているのです。それは〈学校〉です。そして〈学校〉は恐らく、その言葉が持つ全ての意味において、普遍的な状況で文明化するための機能は十分あります。つまり〈学校〉は、人間性に関する全ての宝の山をたっぴりと自由に配給しているのです。（完）

（１）サン＝シモン（一七六〇～一八二五）は、社会改革思想家で、フーリエやオーエンと並ぶ空想的社会主義者。

この翻訳は、アラン「家族感情」Alain, LES SENTIMENTS FAMILIAUX, 1927の全訳である。テキストとしては、Alain, Les Passions et la Sagesse (Bibliothèque de la Pléiade), Gallimard, 1960 に所収されているものを使用している。

アラン（一八六八～一九五一）は「家族感情」を一九二七年九月二三日に発表した。シャルル・ペギーCharles Péguyが一九〇〇年に創刊した『半月手帖』Cahiers de la quinzaine 第十八集の八番目の研究ノートとして掲載したのである。その後、「家族に関する社会学試論」ESSAI D'UNE SOCIOLOGIE DE LA FAMILLEの表題で、『思想集』Idées（一九三九）の中に再度掲載している。しかしながら、ペギーとの関係についてアランは、一九二七年十二月二四日に書いたモール＝ランブラン夫人への献辞の中で、次の様に書いている。

「...良く考えて見ると、ペギーの名前で出版されるので、私は大変にびっくりしています。それは、マルセル・ペギーの夫人が私の生徒だったという事情が物語っています。それから又、マルセル・ペギー自身が私の裡に、シャルル・ペギー、ロマン・ロラン、バンダ、ダニエル、アレヴィ及びその他の一種のグループとしての証人を見出すことを確信していたのかもしれませんが。でも、そのことに関して彼は間違っています。私はシャルル・ペギーとディック・メイ家で一度しか会ったことがありませんし、話をしたこともありません。私は高等師範学校卒の社会主義者が好きではありませんし、ひげ顔のモラリストも好きではなく、異端者たちを恨む人間は尚更好きではなく、集団の人々も好きではありません。私は如何なる集団にもおりませんでした。...私は将来の仲間に、謎めいた筆名を勧めます。決して自分の姿を現さないことです。それは私が社交的であり、未開人ではないということなのです」。

アランの本名はエミール＝オーギュスト・シャルティエÉmile-Auguste Chartierであるが、殆ど全ての作品がアランの筆名で発表されている。それは「社交的であり、未開人ではない」ためであったようであるが、それよりもそれが「如何なる集団」にも囚われなくて、只管真実のみを書くための必然的で最善の方法であったのだろう。勿論、リセ（高等学校）のアンリ四世校の教師としてはシャルティエ先生であった。しかし、シャルティエ先生がアランであることが生徒たちに分かってくると、近隣のソルボンヌ大学生も潜りで授業を受けに来るようになり、大学側からアンリ四世校へ管理して欲しいとの要請があったという。我が国の場合なら逆に、高校側から大学へ学生の管理を要請するようになるが、当時の自由闊達なりせの雰囲気が良い理解出来る挿話である。

アランの生家は、モルターニュ・オ・ペルシュ（オルヌ県）にあるが、私が訪ねた二〇〇六年には保育園になっていて自由に入れなかった。その代わりに近くに設置されているアラン博物館の部屋には、生前の書籍やアランが描いた油彩画などが展示されていて、アラン研究者にとっては宝物で一杯であった。何故ならアランは、私生活について具体的なことは殆ど書いていないから、ルアン新聞の記事などを見ると、当時の具体的な事物を知覚し得たように思えるからである。

獣医だった父親は馬に関する知識は完璧で、天文学から聖人伝まで幅広い知識を持っていた。

アランはこの父親から読書を始め多くのことを教わったが、酒好きで博打好きであつたらしい。父親よりも九歳年下でカフェ店主の娘であつた母親のことをアランは殆ど書いていないが、借金生活の上浮気っぽく軽薄であつたらしい。顔立ちがずっきりとしていて美人であつたという母親は、二三歳でアランを生んだが、難産で危うく死ぬ処であつた。実際にはアランが四二歳の時に、六五歳で亡くなったが、それまではアランが面倒を見ていた。因みに、父親はアランが二六歳の時に、五八歳で亡くなっている。

アランは六歳で地元の小学校へ入学したが、登校前に自分で朝食の用意をしたらしい。フランス人の朝食は極めて簡素であるが、それでも小学生が独りで朝食を摂るのは難儀であつたに違いない。いずれにしてもアランの少年期は余り恵まれていなかったようである。

十三歳でリセのアランソン校へ入学した。リセでの成績は毎学年クラスで一番であつた。先生は、グラン・ゼコール（大学校）でもトップクラスの理工科学校への進学を勧めていた。十八歳の時にパリのヴァンヴ校へ転校し、哲学の教師であつたジュール・ラニョーを知る。それまでは科学的傾向の学習が得意であつたが、十八歳以後は文学や哲学に向かうようになった。アランが好んだのはホメロス、プラトン、デカルト、バルザック、スタンダールであつた。ラテン語よりもギリシア語が得意であつた。

二十歳の時に高等師範学校を受験するが、偶然に試験官だったラニョーは、試験問題であつた「正義」についてアランが熟考したことが無いのを知っていた。このためラニョーはアランが即興で書くのを禁じたため、答案用紙には作詩したソネットを書いて不合格になり、一年間を棒に振った。恐らく、我が国の入試にはあり得ないことであり、考えることすら出来ないであろうが、結果だけ良しとするのは真の教育ではないという思想が理解出来る挿話である。従って、「教育は〈文化〉になり得ない」こともアランは指摘しているが、これは又別の問題である。

翌年の二一歳の時に、晴れて高等師範学校に入学する。素行が良くなく退学しそうになるが、一人前の人間になるための過程の出来事であつたに違いない。読書としてはプラトン、アリストテレス、カント、スピノザ、ヴォルテール、モリエール、ラシーヌ、ラ・フォンテーヌ、ヘーゲルを好んだ。

二四歳で高等師範学校を卒業して哲学の教授資格者となり、リセのポンチヴィ校の教師になる。二五歳でロリアンへ赴任し、三二歳でルアンへ赴任する。三五歳でパリのコンドルセ校の教師になり、三八歳で同じくパリのヴァンヴにあるミシュレ校の教師になる。アラン自身がラニョーから教わったりリセである。四一歳の時にパリのアンリ四世校の教師になり、以後六五歳で定年退職するまで精励恪勤した。

以上がアランの略歴であり、『家族感情』をお読みになる上でも参考になるものと思いご紹介した。しかし、まだ言い残したことがある。それはアランが四六歳（一九一四年八月）から四九歳まで、高齢にも拘わらず志願して第一次世界大戦に参戦したことである。フランスにおいてそれは、後の第二次世界大戦よりも遙かに死者の数も多い悲惨で過酷な戦争であつた。

人間は祖国のために戦うのか、あるいは家族のためなのか。戦地でアランが見て思考したことは、人間性を決定付けて行くようであつた。何故なら、家族と祖国について相似する面と、相違する面を分析して考察することが、アランの思想を理解する上で重要と思うからである。戦後の一九二七年に執筆された『家族感情』は、そういう意味で貴重な作品である。何故なら、そこ

には家族についての愛情と冷静な見方が溢れていて、私たちが祖国や社会についての観念に不足するものもアランは的確に指摘しているからである。

『家族感情』は、そんなにも長い作品ではないので、是非とも最後までお読み戴きたい。アランの文章は人間性に溢れているので、そのことがお分かりになれば、決して解説不明の難解な文章ではないと確信している。アランを読む時は、数式や図形を解くような読み方だけでは不十分であると思う。「AはBであるが又、AはBではない」という書き方が良く行われている。出来れば、好きな人物を理解するように読む必要がある。例えば「神は死んだ！」とニーチェが言った場合と、ヒトラーが言った場合では、同一の言辞であっても明らかに意味合いが全く違って来るのである。嫌いな人物が書いた文章を読む時は、尚更、数式や図形を解くような読み方になるしかないが、アランの文章は取分けアランが好きであることが正しく読む秘訣であると思っている。何故なら、微妙な表現を沈思黙考して理解しなければならない場合もあるからである。〈難しい〉の一言で、性急に片付けては理解出来ないからである。

最後に、アランという一人の人物が好きになり、正しく理解するようにお読み戴ければ、訳者としては大変に嬉しく思う。なお、この翻訳は恐らく本邦初訳であることを申し添えて置く。読者諸氏のご意見ご叱正をお待ちしている。

なお、表紙の写真は、山形県鶴岡市下田沢の「かたくり園」である。（二〇一六年四月二二日・訳者撮影）

二〇一六年五月二七日

東京西郊・たまプラーザの寓居にて 訳者記す

家族感情

(2016年5月登録)

<http://p.booklog.jp/book/106909>

著者：アラン （翻訳：高村昌憲）

翻訳者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/masanorit/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/106909>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/106909>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ